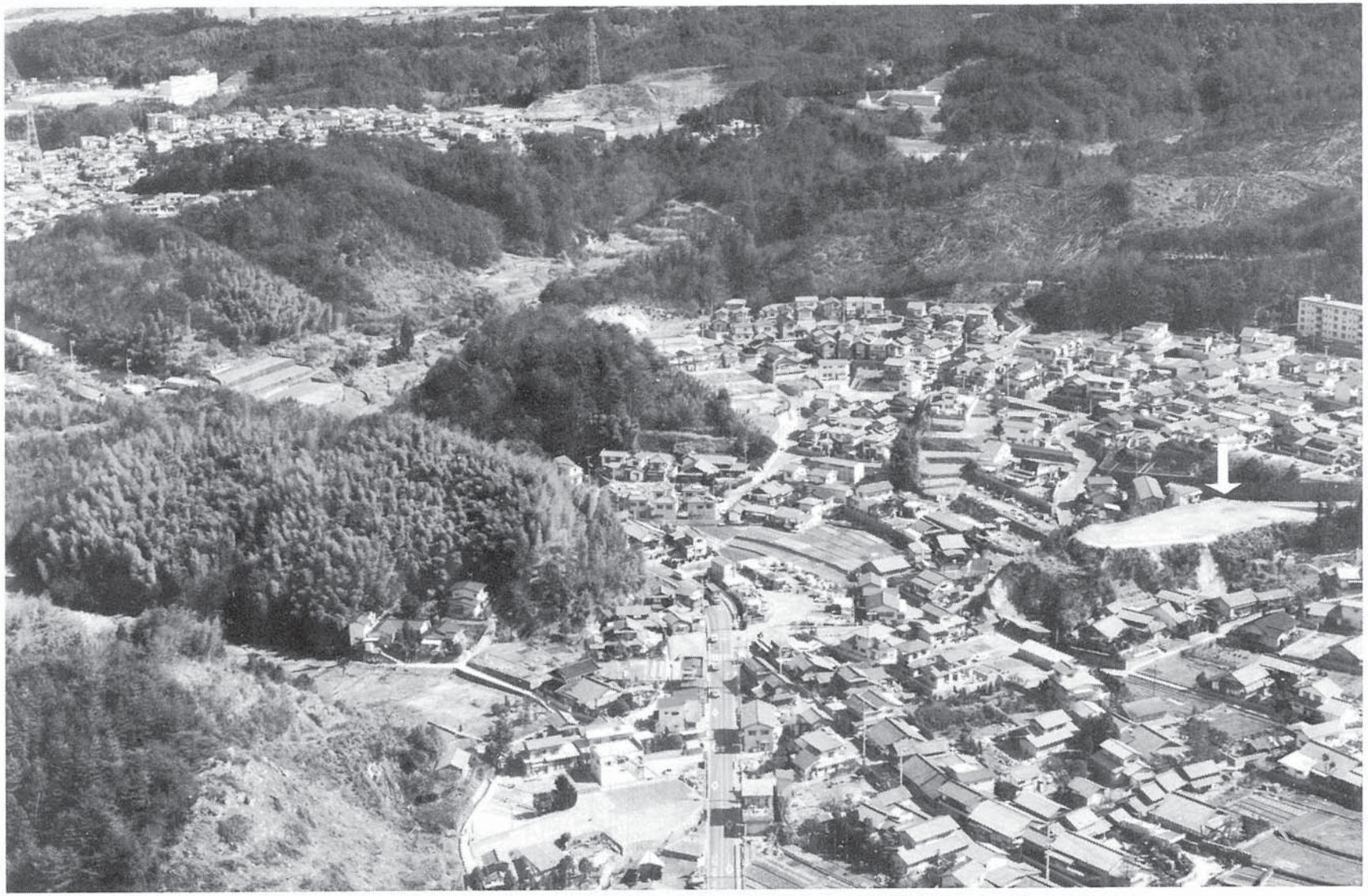
広島市の文化財　第15集

中矢口遺跡発掘調査報告

1980. 3

広島市教育委員会



中矢口遺跡遠望（中央右手の整地された部分）

序　　文

ゆるやかな丘陵地の多い高陽町では宅地化が急速に進み，今では農業地城としての面影は次第に薄れ，都心部へ通う人々の絶好の住宅地城へと大きく変って参りました。

現代の人々にとって住みよい丘陵地は，古代の人々にとっても住みよい場所であったように思われます。このことは，宅地造成予定地で次々と発見される住居址・古墳等の遺跡の分布状況からもうかがい知ることができます。

中矢口遺跡も，高陽町のこのような宅地造成予定地から発見されました。発掘調査現場が，住宅団地内であったためか，現地説明会には小中学生を含む多数の参加者がありました。このことは，新しくこの地に住まわれるようになった方々の郷土の歴史に対する関心の深さを物語るものと思われました。

中矢口遺跡は，４基の竪穴式住居址と１基の箱式石棺からなる小規模な遺跡でしたが，地域の歴史を知るうえで貴重な遺跡であることに違いはありません。

本調査報告書が地城の古代史解明と郷土理解を深めるための一つの礎ともなれば大きな幸せです。

終わりに臨み，今回の発掘調査に対しご指導を賜りました諸先生方およびご協力くださいました多くの方々に厚くお礼申し上げます。

昭和５５年３月

広島市教育長　富　永　治　郎

例　　言

1．　この報告書は宅地造成工事に伴い，昭和54年4月23日から5月31日にかけて実施した中矢口遺跡の発掘調査報告である。

2．　発掘調査は大地興業株式会社から委託を受けて，広島市教育委員会が実施した。

3.　本書の執筆は幸田淳が担当した。

4.　本書掲載の航空写真は，はにわ会会員井手三千男氏から提供を受けた。

5．　本書掲載の地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の25,000分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭55中複，第59号

目　　　　次

Ⅰ　はじめに

1　発掘調査に至るまで …… 1

2　調査の経緯 …… 2

Ⅱ　中矢口遺跡の位置と環境 …… 3

Ⅲ　遺跡の概要

1　第1号竪穴式住居址

遺　　構 …… 7

遺　　物 …… 8

2　第2号・第4号竪穴式住居址

遺　　構 …… 10

遺　　物 …… 11

3　第3号竪穴式住居址

遺　　構 …… 15

遺　　物 …… 16

4　中矢口古墳 …… 17

Ⅳ　まとめ …… 19

図　版　目　次

巻頭図版　中矢口遺跡遠望(中央右手の整地された部分)

図版１　１　遺跡遠景北から(中央↓印)

　　２　遺跡全景南から

図版２　１　第１号竪穴式住居址全景完掘後

　　２　第２号・第４号竪穴式住居址全景完掘後

図版３　１　第３号竪穴式住居址全景完掘後

　　２　第４号竪穴式住居址全景完掘後

図版４　１　第１号竪穴式住居址土器・鉄鎌出土状態

　　２　節３号竪穴式住居址土器出土状態

図版５　１　第１号竪穴式住居址鉄鎌出土状態

　　２　第２号竪穴式住居址鉄鎌出土状態

図版６　１　第４号竪穴式住居址内埋土中鉈出土状態

　　２　中矢口古墳石棺

図版７　　鉄器・石器

挿　図　目　次

第 1図　中矢口遺跡の位置と周辺の主要遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・折り込み 1
第 2図　遺跡地形実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・折り込み 2
第 3図　第 1 号竪穴式住居址実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第 4図　第 1 号竪穴式住居址土器・鉄鎌出土状態実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第 5図　土器実測図 ・・9
第 6図　第 2 号・第 4 号竪穴式住居址実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第 7図　第 2 号竪穴式住居址炉址実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第 8図　第 2 号竪穴式住居址炉址実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第 9図　鉄器実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第 10 図　石器実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第 11 図　第 3 号竪穴式住居址実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第 12 図　第 3 号竪穴式住居址土器出土状態実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第 13 図　中矢口古墳石棺実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

付　表　目　次

付表1　中矢口遺跡周辺の主要弥生時代集落遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
付表2　中矢口遺跡周辺の主要古墳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

Ⅰ　は　じ　め　に

1　発掘調査に至るまで

広島市教育委貞会は,昭和53年6月,広島市高陽町中矢口遺跡所在の丘陵の宅地造成計画を知り,ただちに,県教育委員会及び造成主である大地興業株式会社の三者で協議を行った。協議と並行して,同年8月,県教育委員会と市教育委員会が中矢口遺跡の範囲及び内容確認のための調査を行った。その結果,遺跡は計画地全域に広がる集落址であると予想された。この結果をもとに協議を重ねたが,地形的条件等から設計変更も不可能であり,記録保存もやむなしとの結論を出すに至った。これを受けて,広島市教育委員会が,昭和54年度初夏を目標に発掘調査を実施することになった。

昭和54年4月から発掘調査の準備にかかり,4月23日調査を開始し,5月31日終了した。

2　調査の経過

(1) 調査団の組織

発掘調査は下記のメンバーで当った。

調査委託者　大地興業株式会社

調査主体　　広島市教育委員会

調査担当係　広島市教育委員会社会教育部社会教育課文化財係

調　査　者　成　田　鉞　雄(社会教育課長)

有　谿　盈　雄(社会教育課文化財係長)

柳　川　康　彦(社会教育課文化財係主事)

石　田　彰　紀(社会教育課文化財係主事)

幸　田　　淳(社会教育課文化財係主事調査主任)

池　本　公　二(社会教育課文化財係主事)

浅　川　伸　二(社会教育課庶務係主事事務担当)

調査補助員(五十音順)

発掘作業

石丸義郎,岡田君一,沖田亀三,倉本俊三,倉本節枝,倉本芳人,

迫井秀吉,城山正則,城山ヨシ子,丸本ヤエコ,渡　良郎

整理作業"

近藤玲子

なお,このほか大地興業株式会社,可部郷土史研究会三野丈一氏,高陽公民館土井敏夫館長ほか職員の方々には,調査を円滑に進めるため多大なご配慮を頂いた。また,発掘調査の実施・報告書の作成にあたっては,広島大学文学部考古学研究室,広島県教育委員会文化課,可部郷土史研究会小田一夫,松浦譲二の諸氏から広範な教示を受けた。ここに記して,謝意を表したい。

(2) 調査の経過

昭和54年

4月1日～22日	発掘調査の準備
4月23日	発掘調査開始
4月23日～5月9日	トレンチ設定掘り下げ
5月10日～18日	住居址発掘
5月21日～25日	住居址調査及び箱式石棺発掘
5月28日～30日	実測調査
5月31日	発掘調査終了
7月16日	箱式石棺を口田小学校に移転復元

昭和55年

3月	報告書刊行

Ⅱ中矢口遺跡の位置と環境

中矢口遺跡は広島市高陽町大字矢口字中矢口にあり，標高483.2mのニケ城山から北西に延びる丘陵の尾根の末端に位置している。この尾根頂部は，比較的平坦で，標高45mを測る。眼下には，太田川畔の肥沃な可耕地が広がり，遠くは，旧太田川いわゆる古川を望むことができる。遺跡は通称まむし谷とよばれる湿気の多い谷に南東面する尾根上に位置している。また遺跡は1尾根の中央線より南東半分に片よって造営されている。

中矢口遺跡は，竪穴式住居址4基と古墳1基からなっている。住居址4基のうち2塔は重複しており，建て替えが行われたものと予想される。住居址は3基が円形プランをなし，残る1基が隅丸方形のプランをなす。

竪穴式住居址の名称は，北から第1号，重複したもののうち小型のものを第4号，大型のものを第2号，最も南側に位置するものを第3号とした。古墳は箱式石棺を内部主体とするもので，封土は確認できなかった。

ところで，太田川下流域東岸の高陽町一帯からは，弥生時代以後の遺跡が数多く発見されている。その主なものをあげてみよう(第1図，付表1・2)。西山貝塚は，戸坂地区の南にそびえる茶磨山の標高210mの地点にあり，貝塚を伴う弥生時代終末期の住居址が発見されている。また同じ峰つづきの258mの地点にも貝塚があり，巴形銅器を出土している。これらの遺跡は，瀬戸内海沿岸に広く分布する高地性遺跡の一つとされている。[注1]

また，高陽ニュータウン造成時に発見されたものに，大井B地点遺跡・山手A地点遺跡．真亀遺跡群・寺迫遺跡・西山遺跡・北山遺跡等がある。これらはいずれも弥生時代後期から古墳時代初頭のものとされており，1～8基の竪穴式住居址からなっている。またいずれも標高50～80mの微高地に存在している。[注2]

中矢口遺跡の北方には弥生時代から古墳時代前半にかけて形成された西願寺遺跡群がある。ここからは，土壙墓58基・古墳2基・竪穴式石室6基・箱式石棺1基・壷棺墓1基が検出されている。[注3]

古墳時代に入ると，三角縁神獣鏡を出土した中小田第1号古墳・短甲を出土した中小田第2号古墳が，本遺跡の南約2㎞の標高9Omの丘陵上にある。この2基は，

割石積みの竪穴式石室を内部主体とする前半期の古墳として知られている。[注5]

また中小田古墳と中矢口遺跡との中ほどの低丘陵上には上小田古墳がある。この古墳は組合せ式石棺を内部主体とし,5世紀中葉のものとされている。

その他，高陽ニュータウン造成時に前期から後期にかけての数多くの古墳が発見されている。[注6]

以上概観したように，この高陽町一帯には弥生時代から古墳時代にかけての数多くの遺跡が発見されており，今後も発見されることが予想される。また中矢口遺跡のような住居址を伴う遺跡も多く,太田川下流域の古代の社会構造を明らかにする上でも重要な地域ということができよう。

注1.　松崎寿和・潮見浩「先史時代の広島地方」新修広島市史巻1　1961。
　　松崎秀和「弥生時代の文化と社会」 広島県史　考古編　1979。
注2.　広島県教育委員会「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」1977。
　　未報告ではあるが1979年9月～11月に広島市高陽町岩ノ上城前遺跡の発掘調査が行われ，住居址4基が検出された。なお，このうち2基は10m×8mの大型の方形プランをもっていた。
注3.　広島県教育委員会 「西願寺遺跡群発掘調査報告」 1974。
注4.　松崎序和「占墳時代と統一関家の成立」 広島県史考古編　1979。
注5.　本村豪章「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」 広島考古研究2　1960。
　　松崎寿和　注4に同じ。
注6.　広島県教育委員会「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」 1977。
　　立石古墳発掘調査団「立石古墳発掘調査報告」 1977。

第１図　中矢口遺跡の位置と周辺の主要遺跡

1　中矢口遺跡	2　中小田古墳群	3　上小田古墳
4　西願寺遺跡群	5　立石古墳	6　地蔵堂山遺跡群
7　金平遺跡群	8　大井遺跡群	9　山手遺跡
10･11　恵下山遺跡群	12　寺迫遺跡	13　諸木遺跡群
14　西山・北山遺跡群	15　狐ヶ城遺跡群	

第２図　遺跡地形実測図

地図番号	名称	所在地	平面形	規模	出土遺物	時期
	西山 210 m 貝塚	広島市牛田町西山	隅丸方形			後期
8	大井 B地点遺跡	広島市高陽町大井	方形 方形	4m×4m 4m×4m	土器 土器	後期
			？2			
9	山手 A地点遺跡	広島市高陽町山手	1隅丸方形	6m×5.5m	土器	後期
			2隅丸方形	？	砥石	
			3円形	径　6.3m		
			4不整円形	径　4.5m	後期土器・砥石・刃器	
			5隅丸円形	4.5m以上×4.5m以上		
			6円形？	？		
10	真亀 A地点遺跡	広島市高陽町真亀	1円形	径　8m	土器・砥石	
			2円形？	径　8m？	土器・砥石	
	B 地点遺跡		長円形	7.8m×7m		
	C 地点遺跡		1円形	径　6.2m		
			？	6.9m×3.3m		
			2円形	8.2m×8m	後期土器・青銅鏡	
	D 地点遺跡		円形	径約7m	土器	
	F 地点遺跡		円形	径　4.2m	土器	
	G 地点遺跡		1円形	径　6m	土器	
			2円形	径　6m	土器・砥石	
			3 ？	7.6m×7.2m	後期土器	
			4 ？	8.4m×7.6m	後期土器	

付表１　中矢口遺跡周辺の主要弥生時代集落遺跡

地図番号	名　称	所 在 地	墳形	内 部 主 体	副　　葬　　品	時　期
2	中小田 第 1 号	広島市高陽町	円	竪穴式石室	三角縁神獣鏡	4 C 後
		中小田			禽獣鏡	
					鉄刀・鉄斧	
					勾玉・管玉	
2	第 2 号		円	竪穴式石室	短甲・衝角付冑	5 C 後
					鉄刀・鉄剣	
					小形　製鏡	
					鉄鏃・鍬先	
					鉄鎌・鉄斧・鈷	
10	真 亀 第 1 号	広島市高陽町	方	粘土床の土壙	鉄刀・刀子・鉄鏃	5 C
10	第 2 号	真亀	方	土壙	刀子・須恵器片	6 C 後
	第 3 号		円	無袖の横穴式石室	須恵器 鉄刀・鉄鏃・刀子	6 C 後
					轡・兵庫鎖	
11	恵 下 第 1 号	広島市高陽町 真亀	?	土壙	製内行花文鏡	5 C 後
					勾玉・管玉・ガラス小玉	
					滑石製小玉・鉄鎌	
	第 2 号		?	土壙	鉄鎌・滑石製小玉	5 C 後
6	地蔵堂山第1号	広島市高陽町 金平	方	土壙	素環頭太刀・鉄刀	5 C 中
					具・針・有孔円板	
					鍬先・鉄鏃・鉄斧	
					鉄鎌・刀子状鉄器	

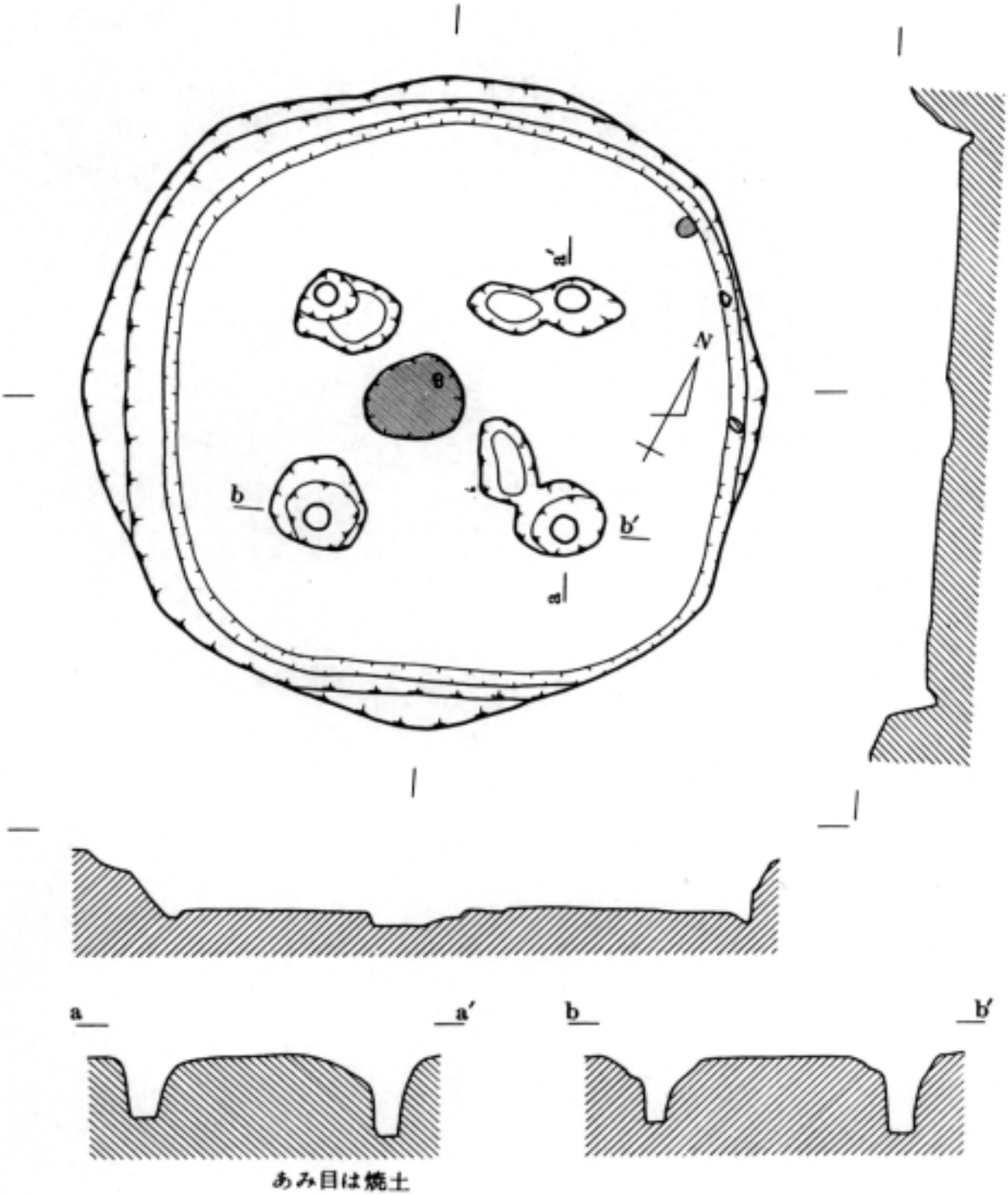
付表２　中矢口遺跡周辺の主要古墳

Ⅲ　遺　跡　の　概　要

1　第１号竪穴式住居趾

遺構(弟３図)

第１号住居址は本遺跡中最も北側にあり，地山を南北5.3m・東西5.3m・深さ45㎝程度掘り下げたもので，平面形は隅丸方形を呈する。



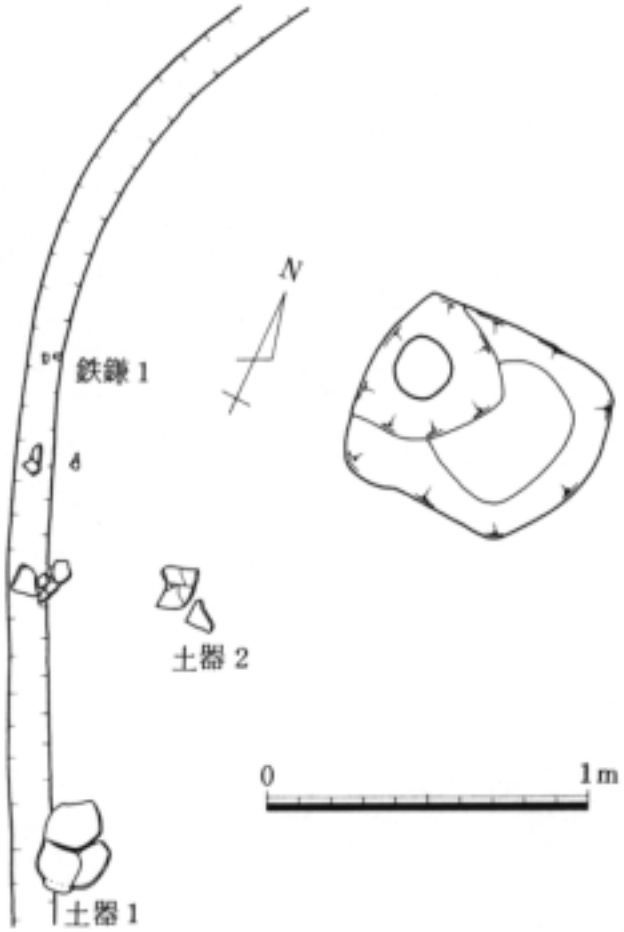
第３図　第１号竪穴式住居址実測図

第1号住居址中央には,焼土が検出され,焼土下に深さ約13cmから7cmの掘り込みが発見された。柱穴と思われるピットは,4ヵ所あり,深さは床面から55㎝～70cmを測る。直径はいずれも20㎝前後であった。また,住居址内の四囲には周溝が見られた。

遺物

第1号住居址内埋土及び床面からは,比較的多くの土器が出土したが,小片が多く器形を推定できるものは,西壁直下の床面から出土した2個体分のみであった。(第4図)

また，西壁周溝内より鉄片2が検出された。この鉄片は互いに接合し,鉄鎌と判明した。



第4図　第1号竪穴式住居址
土器･鉄鎌出土状態実測図

土器1(第5図1)器高17.5cm・口径15.8cm・器高の$\frac{1}{2}$で最大胴径17.2cmを測る甕形土器である。口縁部は,くの字形に外反し,口縁端にいくに従って厚みはやや減少する。胴部は，ほぼ球形をしており丸底である。また,口縁部は横方向,その直下には左下方向,底部付近は右下方向にハケ目が認められる。口縁部内側には,横方向のナデ調整が施され,胴部内側全面には,ヘラ削りによる調整が,丁寧になされている。色は赤褐色で,胎土には砂粒を含み，焼成は比較的良好である。

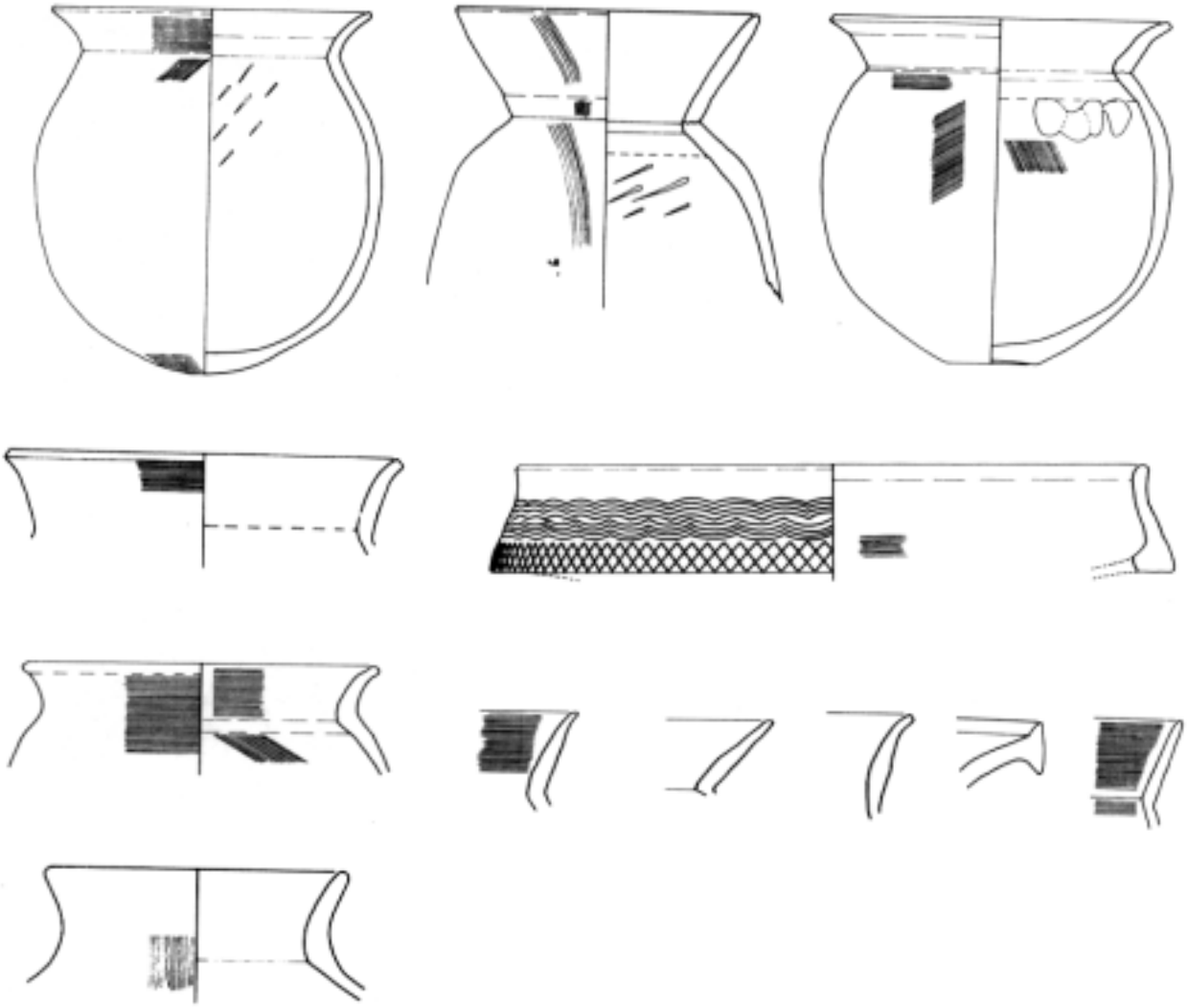
土器2(第5図2) 口縁部のみ残存しているが，甕形土器と考えられる。口径は14.2㎝で,くの字形の口縁部は,長くまっすぐにのび，口縁部にいくに従って厚みは減少する。残存部全面にハケ目がみられ，器壁内部には，ヘラ削りによる調整が頸部まで施されている。色は明灰褐色で,胎土には砂粒を含むが,焼成は比較的良好である。

鉄鎌1(第9図1) 中央部分で折損していたが，現存する各部の計測値は以下のとおりである。

現　存　長　7.2cm
現存最大幅　1.5cm
刃部の厚み　0.2cm

刃部は，わずかに内側に曲がり，背部もほぼ同じカーブを描く。折り返し部，刃先部とも欠損しているが，小形出刃の刈鎌の特徴を有している。[注1]

注1　本遺跡出土の鉄製品については，広島大学文学部考古学研究室川越哲志氏の教示を得た。



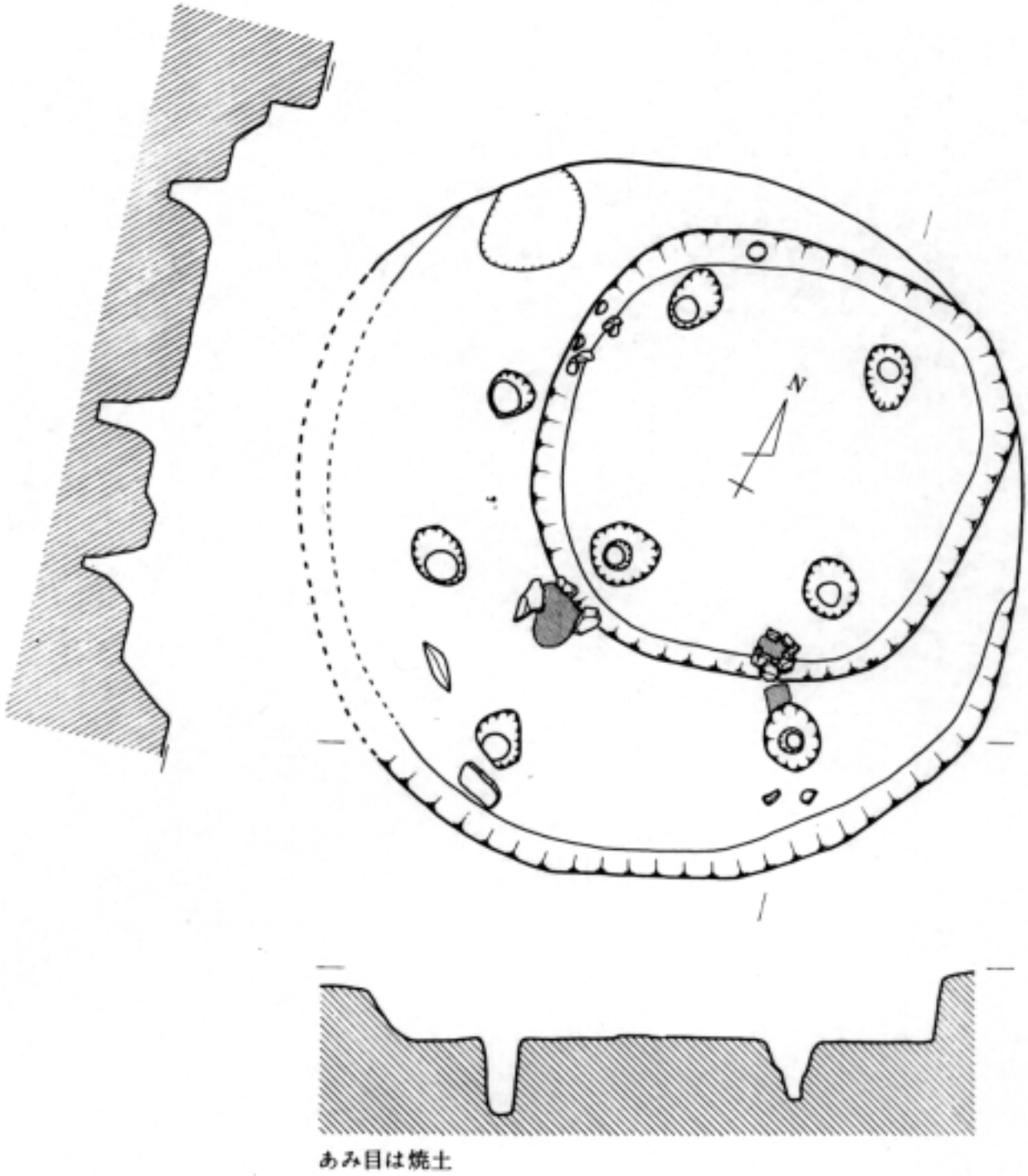
第5図　土　器　実　測　図

2．第2号・第4号竪穴式住居址

遺　構(第6図)

第2号・第4号竪穴式住居址は重複しており,建て替えが行われたものと思われる。この住居址は,第1号住居址と接するようにして掘り込まれていた。

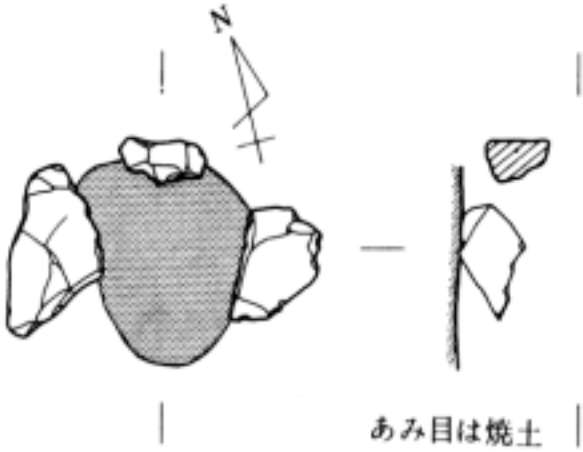
第4号住居址は,南北3.9m・東西4.2m・深さ75cm程度を測る円形の住居



第6図　第2号・第4号竪穴式住居址実測図

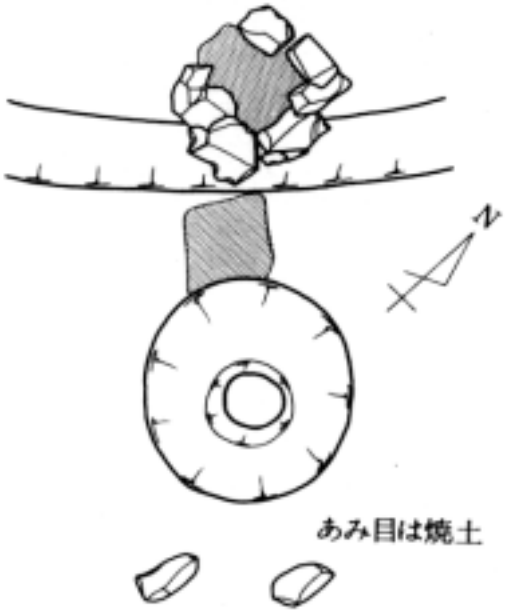
址である。柱穴と思われるピットは4カ所あり,深さは床面からいずれも55㎝程度,直径はいずれも25㎝前後であった。

第2号住居址は,南北6.4m・東西推定6.5m・深さは東壁側で63cmを測る円形の住居址である。柱穴と思われるピットは,4ヵ所あり,深さは床面からいずれも60cm程度,直径はいずれも25㎝前後であった。柱穴の配置からみて,第2号住居を造営する段階で,第4号住居の柱穴を再利用したと考えられるが,柱穴の規模がほぼ同じであるため第2号住居が何本柱の上屋をもつかは不明である。



第7図　第2号竪穴式住居址炉址実測図

また，第2号・第4号住居址南西及び東南の境にそれぞれ割石3個と6個によるコ字形の石組みがあり，内部から焼土が検出された。前者（第7図)は開口部を南に向けており，後者（第8図）は西に向けていた。



第8図　第2号竪穴式住居址炉址実測図

第4号住居址北西の住居外には,深さ20～30cm.直径約80cmの円形の袋状土壙が検出されたが,これは第4号住居址に伴う貯蔵穴とも考えられる。

遺　物

第2号住居址の床面近くからは，比較的多量の土器片を検出したが，第4号住居址の床面上からの出土は，皆無に近かった。第2号住居址出土土器のうち器形を推定し得るものは6点あり，いずれも口縁部のみの出土であったが，甕形土器と考えられる。また，第2号住居址最南部の柱穴から鉄鎌残片1を，第4号住居址北側から磨り石1を検出した。

なお，第4号住居址中央部の埋土の浅い地点から鈍1が出土したが，これはその出土レベルが第1号住居址西壁肩のレベルとほぼ同じである点及び出土状

態等から第1号住居址に伴うものと考えられる。また,第2号住居地南壁肩から1.5mの地点で,大型蛤刃石斧残片1を検出した。

土器3(第5図3)口径19cmで,口縁部はくの字形に外反し,口縁端で再度わずかに開く。また厚みは,口縁端に近づくに従って減少する。器表には横方向のハケ目がみられるが,内側は磨滅が著しく,調整法は不明である。色は明赤褐色で,胎土中には砂粒を含み,焼成は不良である。

土器4(第5図4)口径は14.2cmで,口縁部はにぶく外反しており,口縁端部は,その内側にわずかに凹みをもち,丸く処理されている。器壁の内外には,全面にハケ目がみられる。色は明灰褐色で砂粒を含むが,焼成は比較的良好である。

土器5(第5図5)口径11.4cmで,口縁部はにぶく外反する。器表には頸部から上下にハケ目がみられる。色は明灰褐色で,胎土中には砂粒を含むが,焼成は比較的良好である。

土器6(第5図6)同一個体と考えられる数個の土器片の出土があったが,胴部以下は小片であり,接合しないため器高・口径等は不明である。にぶく外反した口縁部は,長く,まっすぐにのび口縁端部は口縁基部に比して$\frac{1}{3}$の厚みとなる。口縁部内側には横方向のハケ目がみられた。本品は,全体に器壁が薄く,胎土は緻密であり,焼成も良好で,色は灰色を呈する。

土器7(第5図7)くの字形の口縁部は,長く,ラッパ状に開き,厚みは口縁端にいくに従って減じていく。口縁部内側は,横方向のナデ調整が施されている。色は明赤褐色で,砂粒を含んではいるが,焼成は比較的良好である。

土器8(第5図8)にぶく外反する口縁部は,長くのび,口縁端部は肉薄になる。器表の磨滅が著しく,調整万法は不明である。色は赤褐色で,胎土中には砂粒を含み,焼成は不良である。

鉄鎌2(第9図2)刃先部分を欠損しているため,全体を知ることはできないが,現存する部分の計測値は以下のとおりである。

現存長	6.6㎝
現存最大幅	2.6㎝
刃線と柄部の角度	85°

幅は,現存部ほぼ中央部分まで変わらないが,刃先にいくに従って減じていく

ものと思われる。これは研ぎ減りと考えるのが妥当であろう。背は直線的である。折り返し部分は,湾曲しており,着柄の際,柄に打ち込んだ可能性が強い。本品は刃先を欠損しているため,刈鎌か,摘鎌か明確にし得ないが,形態的には摘鎌の可能性があるものの,ここでは刈鎌として考えたい。

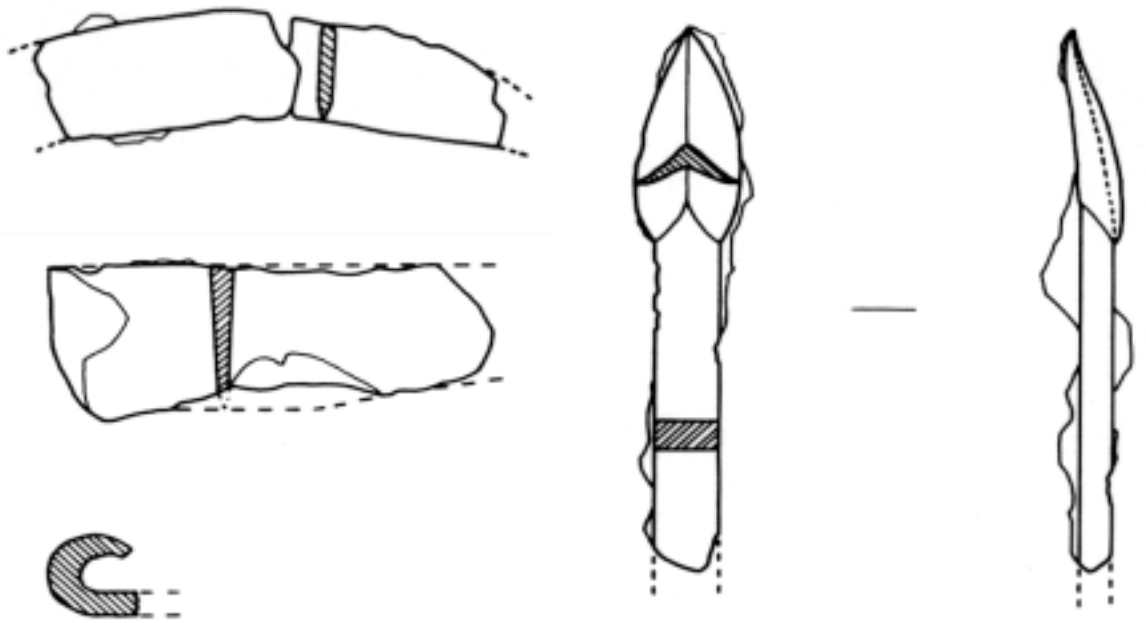
磨り石1(第10図1)直径11cmの円形で断面は比較的扁平である。材質は褐色の水成岩と考えられる。

鉈(第9図3)造りのしっかりした良品であるが,茎部の一部を欠損しており,全長を知ることはできない。現存する各部の計測値は以下のとおりである。

現存長	9.7cm	茎部長	5.9cm
刃部長	3.8cm	茎部幅	1.Ocm
刃部最大幅	1.6cm	茎部厚さ	O.5cm

この鉈の刃部は鏝形をしており,表には鎬がみられ,裏すきをもつなど,鉈としては全体に古式の様相を示すと考えられる[注1]。なお,茎部には木質が残っておらず,着柄法は不明である。

注1　古瀬清秀「古墳出土の鉈の形態的変遷とその役割」考古論集1977。
によると,この鉈はⅡa類に属するものと思われ,古墳時代前半期に集中してみられるものである。



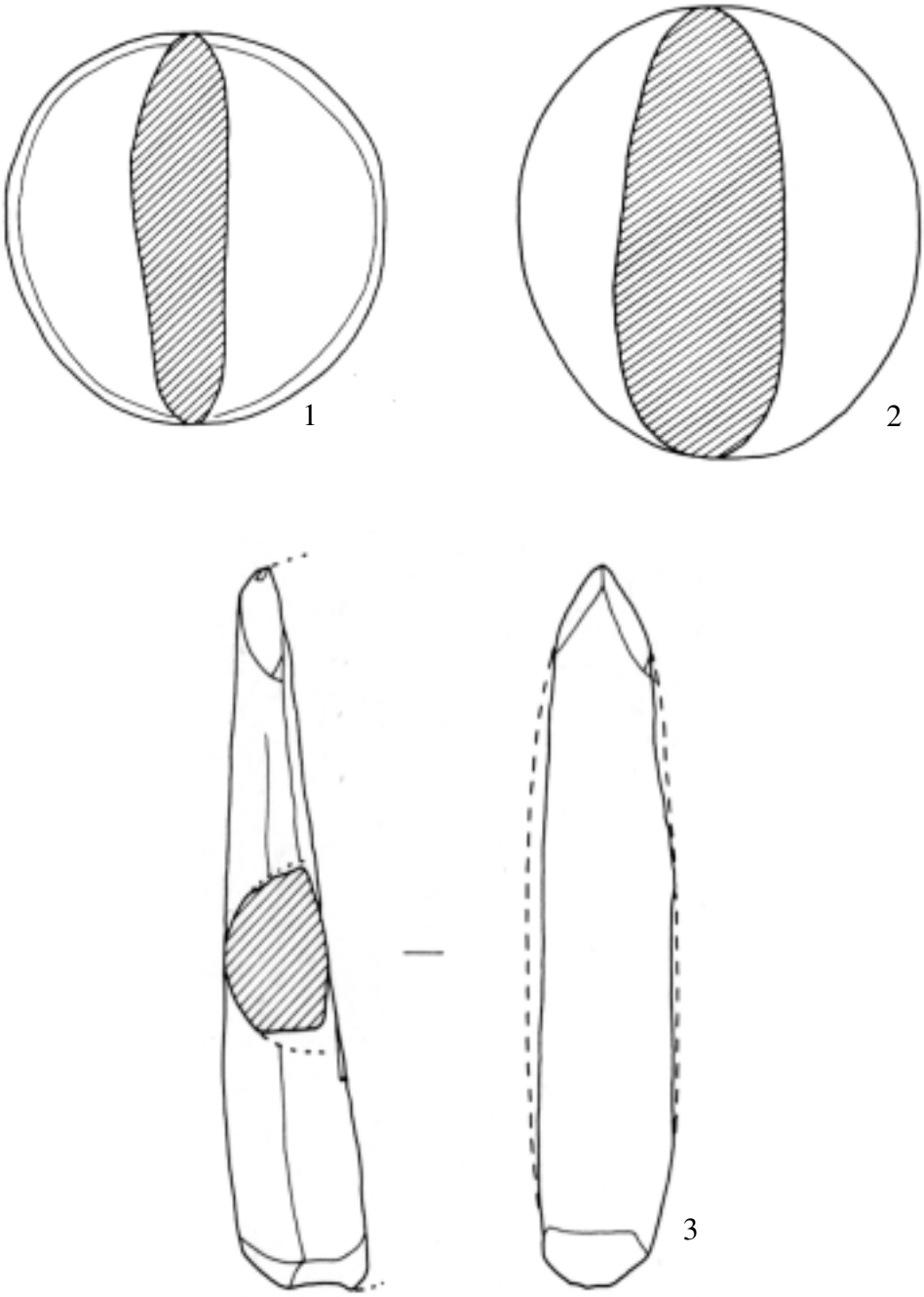
第9図　鉄　器　実　測　図

石斧(第10図3)本品は縦に折損しており，全体の $\frac{1}{3}$ 強が残っている。形態からみて大型蛤刃石斧の残片であると考えられる。現存する各部の計測値は以下のとおりである。

現　存　長　14.2cm

現存最大幅　3.2cm × 3 ㎝

刃部にはほとんど使用痕がみられない。材質は緑灰色を呈する水成岩である。

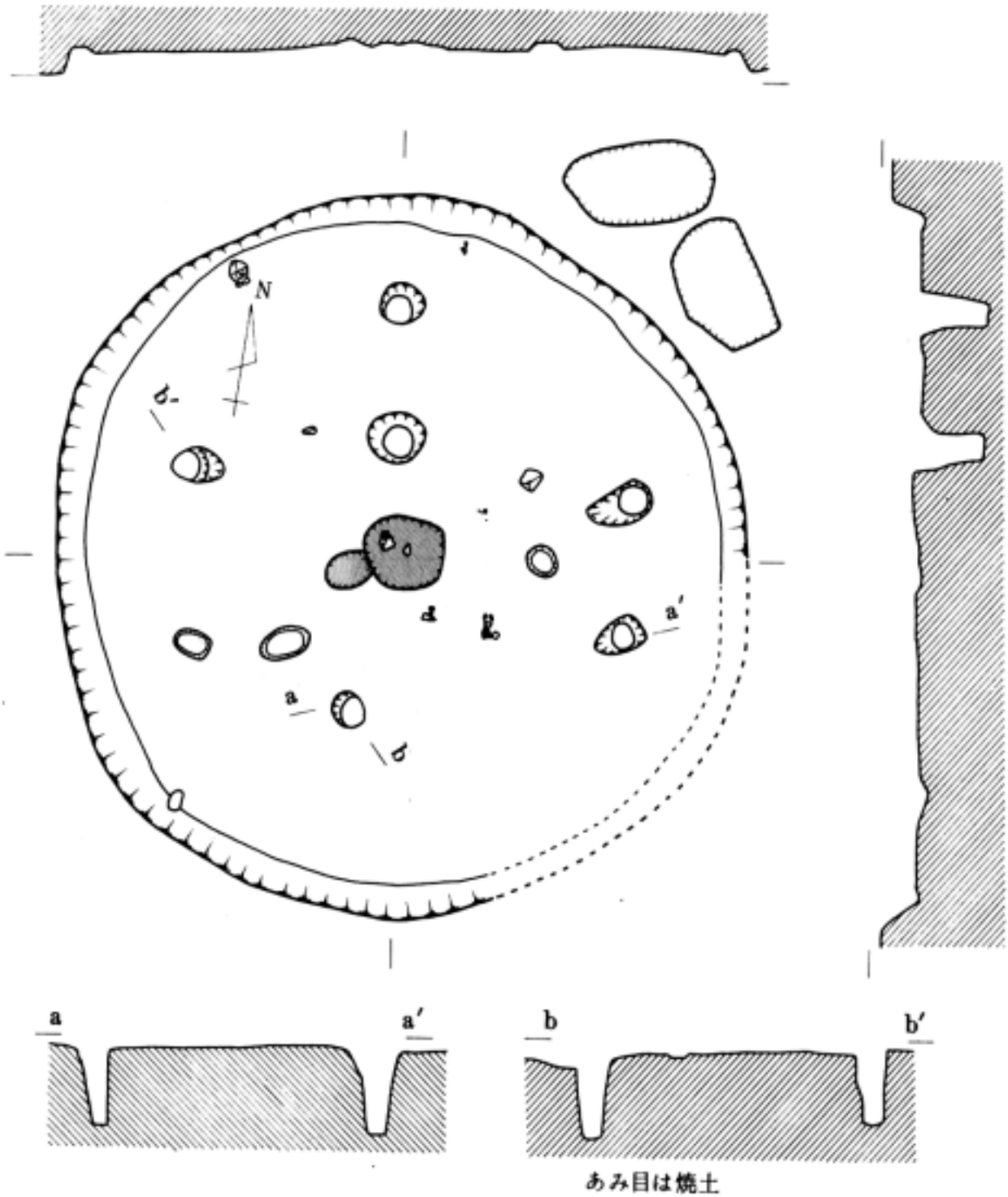


第10図　石　器　実　測　図

3．第3号竪穴式住居址

遺　構(第11図)

土取り工事のため南東側 $\frac{1}{4}$ を失っているが，南北6.5m・東西6.5m・深さ40㎝程度を測る円形の住居址である。柱穴と思われるピットは6カ所発見されたが，位置関係からみて主柱穴は4本であり，他の2本は補強柱のためのもの



第11図　第3号竪穴式住居址実測図

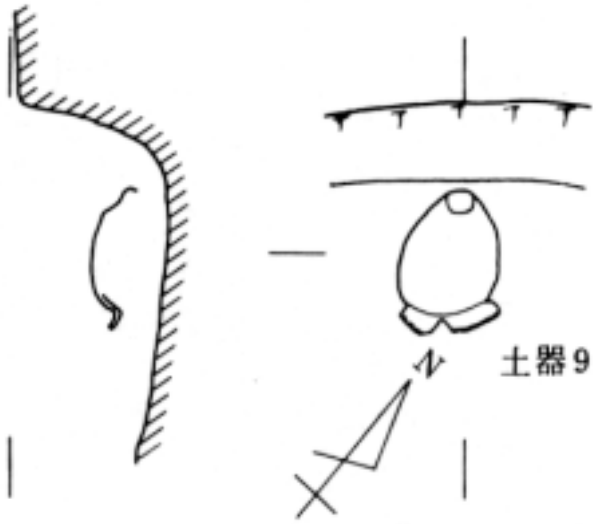
と考えられる。これらはいずれも，深さ60㎝程度で，直径は25㎝前後であっだ。また，住居中央部には焼土が検出され，焼土下には，1.1mXO.7mの不整円形をした深さ8㎝程度の掘り込みが発見された。

住居外の北西辺には，1.1mXO.75mと1.4mXO.7mの2カ所の掘り込みがあったが，いずれも深さ5～10㎝程度の浅いもので，遺物も皆無であるため用途は不明である。また，北壁から北西に向ってまっすぐ，長さ5m・幅0.3m・深さ5～10cmの溝状遺構が見られた。この溝状遺構は排水溝とも考えられるが，第2号住居址近くまで延びていることもあって，その使途は判然としない。

遺　物

第3号住居址からは，土器の出土は極めて少なく，器形を推定できるものは，壷形土器2・甕形土器2のわずかに4点であった。このうち甕形土器1点は完形に近いものがあり，住居内北壁直下の床面から出土した。（第12図）

他の3点は，いずれも口縁部のみであったが，甕は住居中央部の焼土内から，壷のうち1点は，いわゆる複合口縁で，住居内西側寄りの床面から，他の1点は住居内北西隅の床面から磨り石と伴に出土した。



第12図 第3号竪穴式住居地
土器出土状態実測図

土器9(第5図9)　器高18.6㎝・口径15.3cm・器高の $\frac{1}{2}$ で最大胴径16㎝を測る甕形土器と思われる。口縁部は，くの字形に外反し，口縁端部1.5cmのところで再度外反する。厚みは口縁端に近づくに従って減少する。胴部は球形で底部は凹底である。

また，口縁内側には横方向のナデ調整がみられ，口縁直下には，指によるものと思われる圧痕があり，ヘラ削りが胴部内側の下半にみられた。また，胴部表面にはハケ目がみられた。色は暗褐色を呈し，胎土中には砂粒を多く含み，焼成は不良でもろい。

土器10(第5図10)口縁部のみの出土であり,器形は壷形土器と考えられる。口径は27.6cmを測り,円傾しながら直立し,口縁端は肉厚になる。器表には,口縁端から2cmのところに,4本1組の弧状の沈線が,たがい違いに向いあって1対地され,その直下には斜格子の沈線文が認められる。また口縁部内側には,横方向のハケ目がみられる。色は淡赤褐色を呈するが,内側は焼成不良のためか黒色を呈しており,胎土中には砂粒を含む。

土器11(第5図11)口縁部のみの出土であるが,その形状から壷形土器と考えられる。口縁端部は肥厚しており,施文はみられない。また磨滅が著しく調整法は不明である。色は赤褐色で,胎土中に砂粒を多く含み,焼成も不良である。

土器12(第5図12)口縁部のみであるが,甕形土器と考えられる。にぶく外反した口縁部は,長くまっすぐに開く。器壁内側には横方向のハケ目がみられる。色は赤褐色で,胎土中に砂粒を多く含み,焼成も不良である。

磨り石2(第10図2)長径11.2㎝・短径9.4cmの惰円形に近く,最大の厚さは4cmある。材質は青灰色の水成岩である。

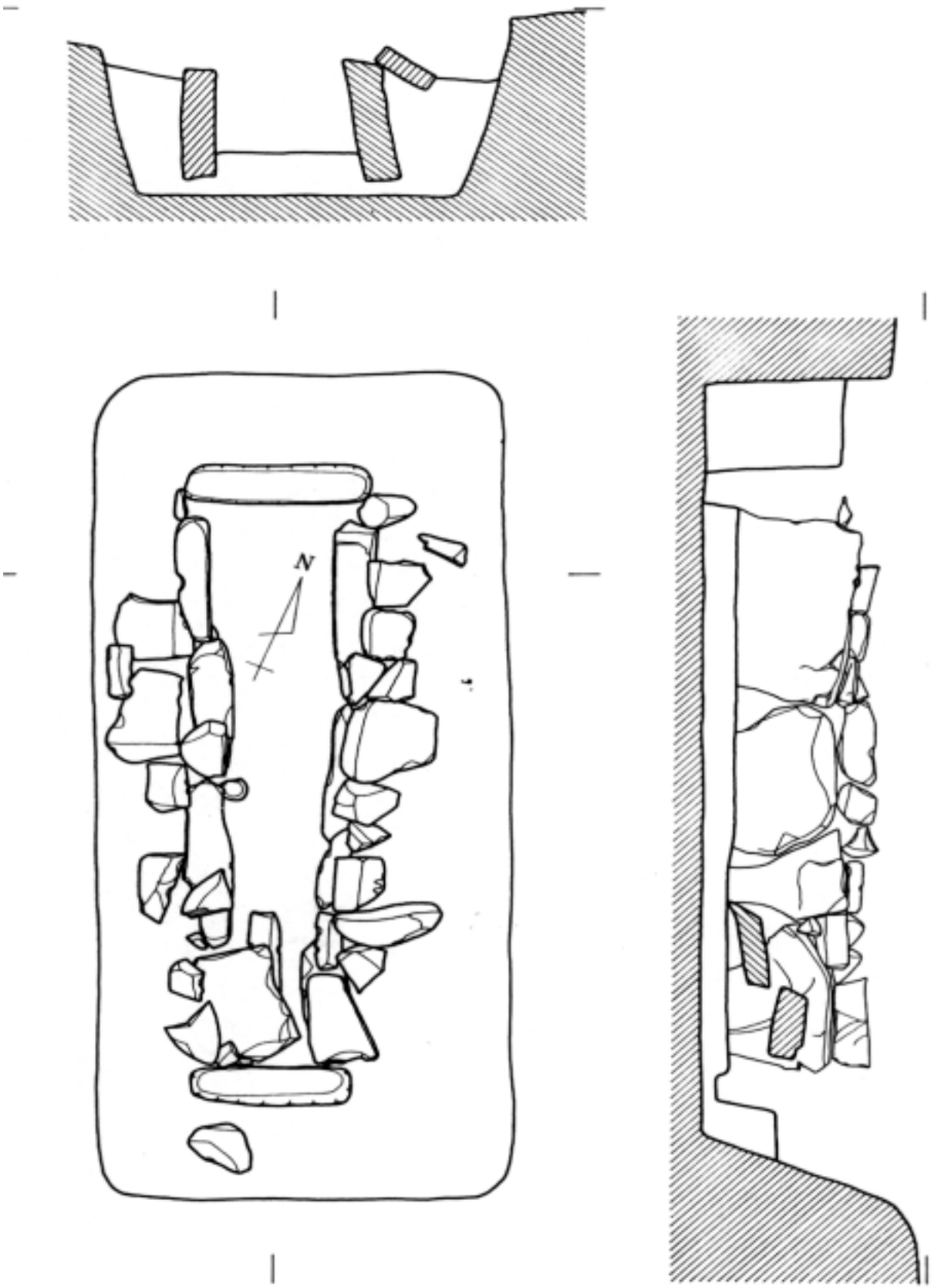
4.中　矢　口　古　墳

古墳は第1号住居址西側1mのところに,主体部東半分を地山上に乗せるようにして築造された箱式石棺を内部主体とするものである(第13図)。しかし既に述べたように,封土は確認できなかった。

箱式石棺は,主軸をN22°Wに向けており,内法長200cm・幅は北側39㎝・南側推定25cm・高さ45cmを測る。側壁は東西とも4枚の板石からなり,横位置の広口積みにし,その上に割り石が側壁面よりわずかに後退するように,一段ほど小口積みにされていた。この箱式石棺は290㎝×130㎝の土壙内に埋置されており,西壁の石は地山に乗っておらず,そのためか,比較的安定性のある板右を選んで使用している。

この箱式石棺は,蓋石と両奥壁の石を欠いているが,これは板材を使ってその用を足したと考えることが妥当であろう。また側壁上部の割り石は,蓋材が動かないように受けを作る目的で置かれたものではないかと思われる。なお,副

葬品は全く見られなかった。



第 13 図　中矢口古墳石棺実測図

Ⅲ　ま　と　め

既に述べたように,中矢口遺跡は,4基の竪穴式住居址と1基の箱式石棺からなる遺跡である。しかし,遺跡の周辺は,宅地造成等による地形変更が著しく,かつて遺跡がどの範囲まで広がっていたかは不明である。また遺跡の立地する尾根も耕作等による攪乱を受けていた。

さて,中矢口遺跡出土の完形もしくは器形を推定できる土器は,わずかに12点である。このうち甕形土器10点についてみると,形態的には,それぞれの土器の間には,大きな時期差は認められない。しかし,土器3・9以外は,その形態及び製作手法等からみていずれも古式土師器の範疇に入るものと考えられ,土器3・9は,これらよりわずかに先行するものであろう。[注1]

また住居址の構造・位置関係等を概観してみると,

1. 第2号・箱3号住居址は,その規模・構造等が極めて類似している。
2. 第4号住居址は,第2号住居址に先行するものと考えられる。
3. 第1号住居址と第2号(または第4号)住居址は互いに接していることから,上屋施設を配慮するとき,同時性は考えられない。

などの諸点がみられる。

以上のことから,4基の住居址の造営は

第3号 ――――- - - - - - -――――→

第4号 ――――→ 第2号 ――――→

第1号 ――→

の順でとらえられよう。

最後に中矢口古墳について概括しておきたい。この古墳は箱式石棺を内部主体とするものであるが,封土の存在及び規模等は確認できなかった。

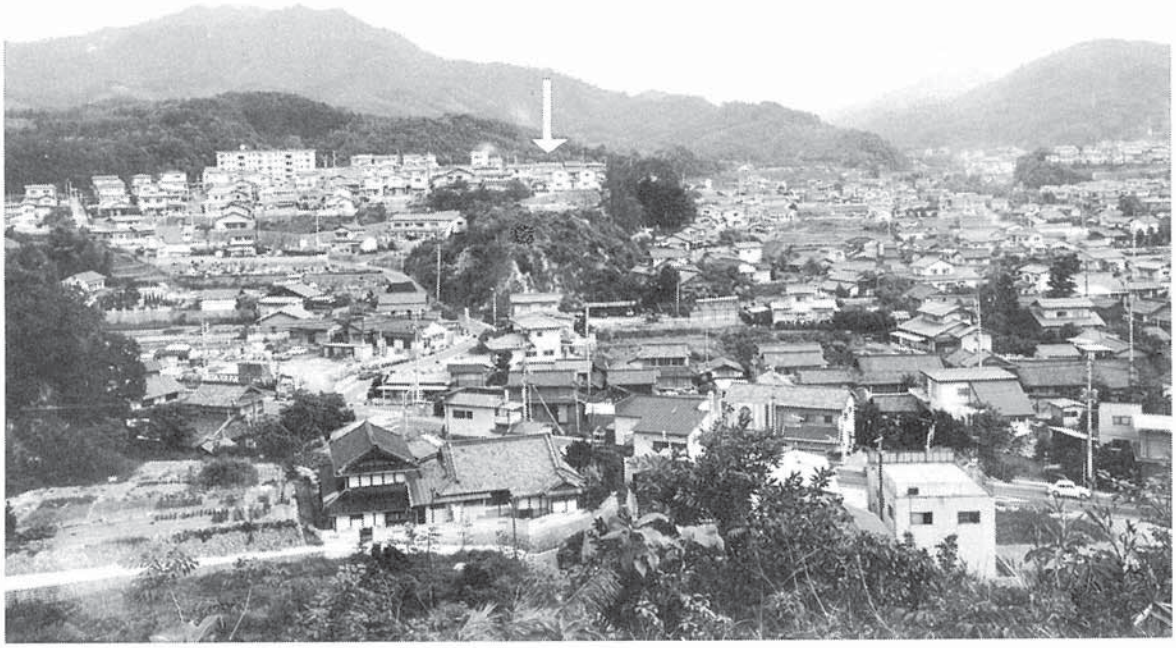
さて,この箱式石棺は,地山の平坦面から傾斜面への地形の変換点に立地している。このような不利な条件のもとでの占地の意図をうかがうことはできないが,悪条件を克服する手段として,埋土部分に位置する石棺の西壁には,棺材の中でも比較的安定性のある板石を選んで使用して,棺全体の安定化をはかっている。

また石棺の両側壁は,4枚の板石を横位置の広口積みにしており,側壁上には

蓋材の受けと思われる施設を作り,これらを土壙内に埋置するという,比較的手の込んだ構造をもっている。副葬品を全く欠いているため,明確な築造の時期を判断し得ないが,構造反び他遺跡の類例[注2]からみて,古墳時代前半期に入るものと考えたい。

注1. 本遺跡出土の土器については県教育委員会文化課指導主事加藤光臣氏の教示を得た。

注2. 立石古墳発掘調査団「立石古墳発掘調査報告」1978。
禅昌寺西遺跡発掘調査団「禅昌寺西遺跡発掘調査報告」1980。



1　遺跡遠景　北から（中央↓印）

2　遺跡全景　南から

1　第1号竪穴式住居址全景　完掘後

2　第2号・第4号竪穴式住居址全景　完掘後

1　第3号竪穴式住居址全景　完掘後

2　第4号竪穴式住居址全景　完掘後

1　第1号竪穴式住居址土器・鉄鎌出土状態

2　第3号竪穴式住居址土器出土状態

1　第１号竪穴式住居址鉄鎌出土状態

2　第２号竪穴式住居址鉄鎌出土状態

1　第4号竪穴式住居址内埋土中鉋出土状態

2　中矢口古墳石棺

鉄器・石器

広島市の文化財　第15集

中矢口遺跡発掘調査報告

1980年3月

編集
発行　広島市教育委員会（社会教育課）
広島市中区国泰寺町一丁目6－34
TEL広島（0822）45－2111（代）

印刷所　電子印刷株式会社
広島市中区堺町一丁目1－5
TEL広島（0822）32－3770